

2. 水産種苗供給事業

(1) クロダイ種苗養生事業

現在県下におけるクロダイの養殖は、一部の養魚池を除いてはその殆んどが、潮溜り、干拓地、廃止塩田などを利用した池で、粗放的に養殖されているか、またボラなどと混養されているのが現状であり、その種苗は6月下旬から8月上旬にかけて沿岸の藻場に現われる全長5～8cm、体重5～10g程度のもを使用するのが普通である。しかしこのような養殖方法では、小型魚を種苗としていたのでは放養後の歩留りが悪く、これまであまりよい結果が得られていないため、時期的には多少遅れても今少し大型魚で全長10cm以上、体重30～40g程度の種苗の要望が高まってきている。したがって、今年度は小型種苗を養成し、大型化したものも種苗として一部供給したが、その養成概要は次のとおりである。

ア 養成池

10m×60mの全面コンクリート池を水深1.8mとし、止水により養成した。なお高水温時の明け方など鼻上げの傾向のある時は適宜注水するようにした。

イ 養成期間

昭和40年8月2日～昭和40年12月10日 130日間

ウ 種苗および放養数量

静岡県浜名湖で漁獲された天然稚魚で2～3日生により蓄養したものを8月2日10,000尾を陸上輸送をして養成池に放養した。放養時の1尾当り平均体重は6.1g、平均全長6.8cm（各60尾平均）であった。

エ 経過概要

A 水温，比重

養成期間中の旬別水温，比重は図1に示すとおりである。

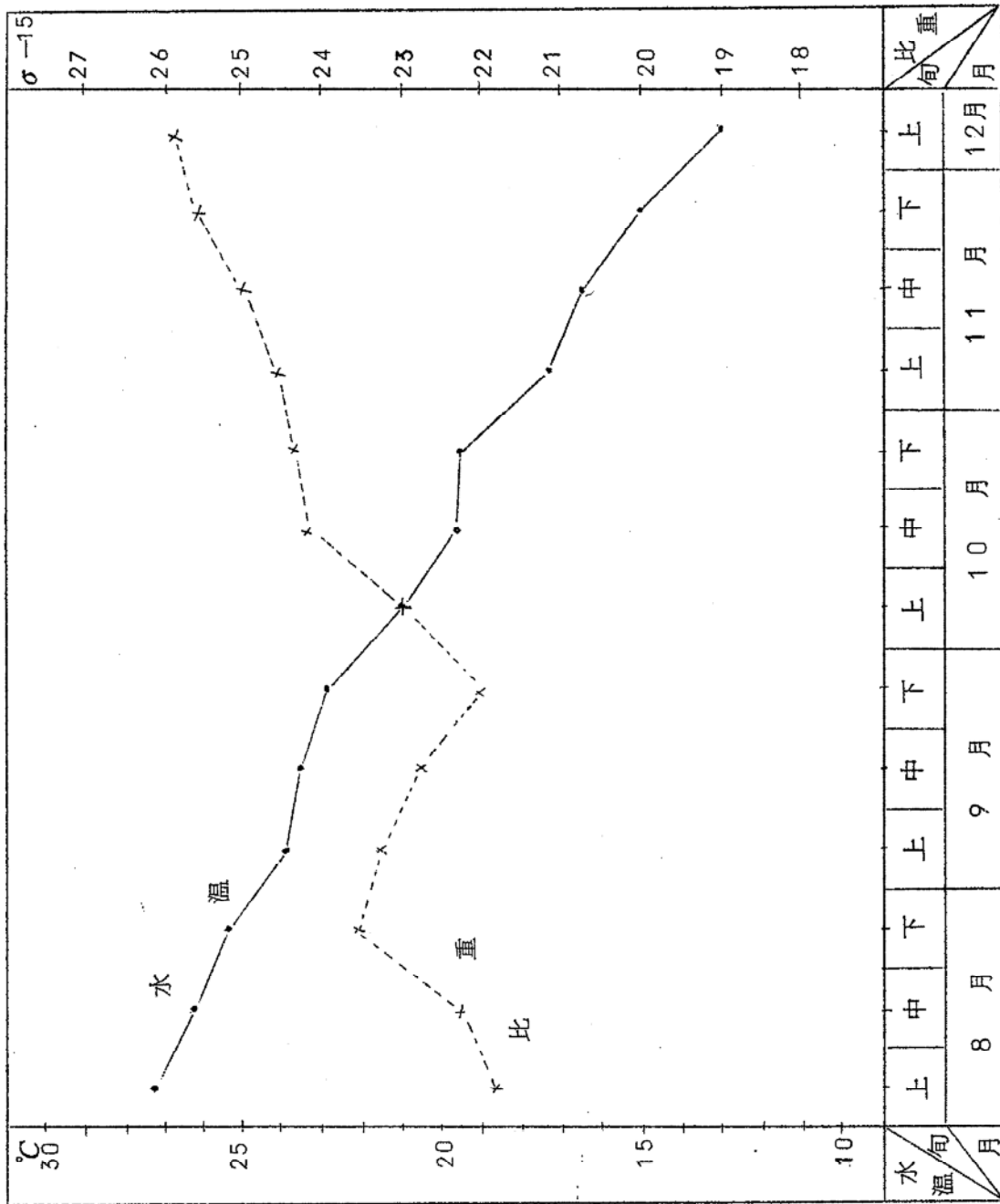


図1 旬別水温・比重の変化(10時観測平均)

B 餌料

餌料は、生カタクチイワシのミンチしたものを放養翌日の8月3日から10月末日までは朝夕の2回投与し、11月からは水温の下降に伴い摂餌量も減退したので1日1回とした。

摂餌状況は放養後3～4日は投餌してもあまり投餌場所へ集まって摂餌するようなことはなかったが、5日目頃より投餌場所に人が立つだけで集まり、投餌すれば直ちに殆んど水面上で活発に摂餌するようになった。また投餌量はその時の摂餌状況により適宜増減しておこなうようにした。期間中の投餌量は、表1のとおりであ

る。

表1 投餌量

単位 kg

月 旬 餌料	8			9			10			11			12	計
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	
生カタクチ イワシ	150.0	130.0	156.0	167.0	164.0	174.0	147.0	94.0	100.0	37.0	48.0	50.0	20.0	1,437.0

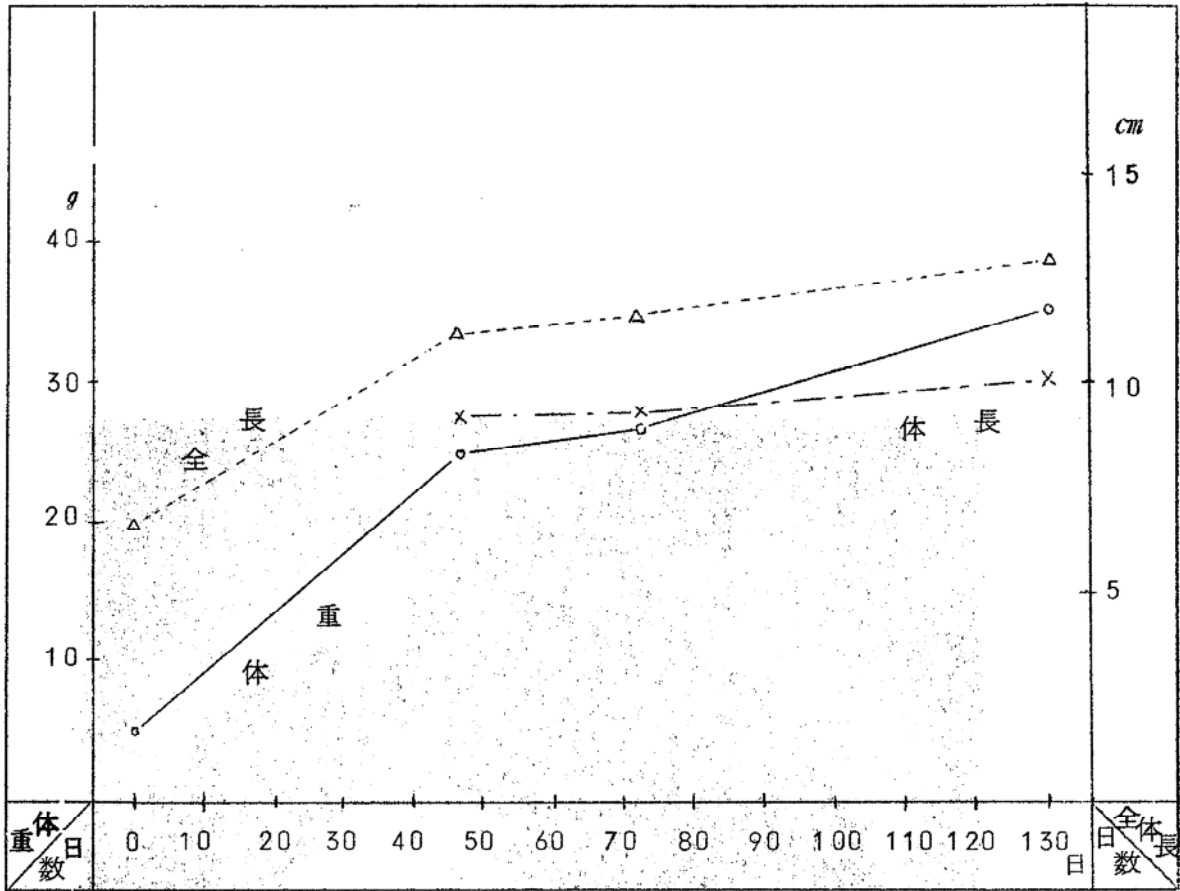
○ 成 長

放養後の成長は、表2、図2に示すとおりで放養後130日で体重6倍、全長2倍に成長した。これは天然におけるクロダイの成長が1年で体長12cm前後といわれていることから考え合わせると、天然に比べて決して悪いものではないように考えられる。

表2 成 長

計測日	8月2日	9月18日	10月14日	12月10日
養成日数	0日	47日	73日	130日
計測尾数	60尾	12尾	20尾	60尾
平均体重	6.1g	25.6g	27.5g	36.1g
平均体長	—	9.2cm	9.4cm	10.3cm
平均全長	6.8cm	11.4cm	11.8cm	13.0cm

図2 平均成長図



D. へい死

養成期間中のへい死状況および不明魚は表3のとおりである。

表3 へい死状況

単位 尾

月旬	8			9			10			11			12	不明魚	計
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上		
へい死数	508	23	3	0	1	2	0	12	28	21	32	54	163	1,384	2,231

8月上旬のへい死は、放養後3日目までにその大半がへい死したもので、これらは網ずれなどによる損傷魚が殆んどであった。9月にはあまりへい死は見られず、10月中旬頃より非常に衰弱したへい死魚が目立つようになり、11月にはそれがかなり多くなった。へい死魚を肉眼的に観察したところでは、内臓部、皮膚面には

異常が認められず、鰓には *Clavellodes ditrematis* の寄生が多数に認められた。したがって衰弱への死の直接原因はこれの大量寄生によるものと考えられる。

E 疾 病

前述の *Clavellodes ditrematis* の寄生以外にはそれらしきものは見当らなかった。

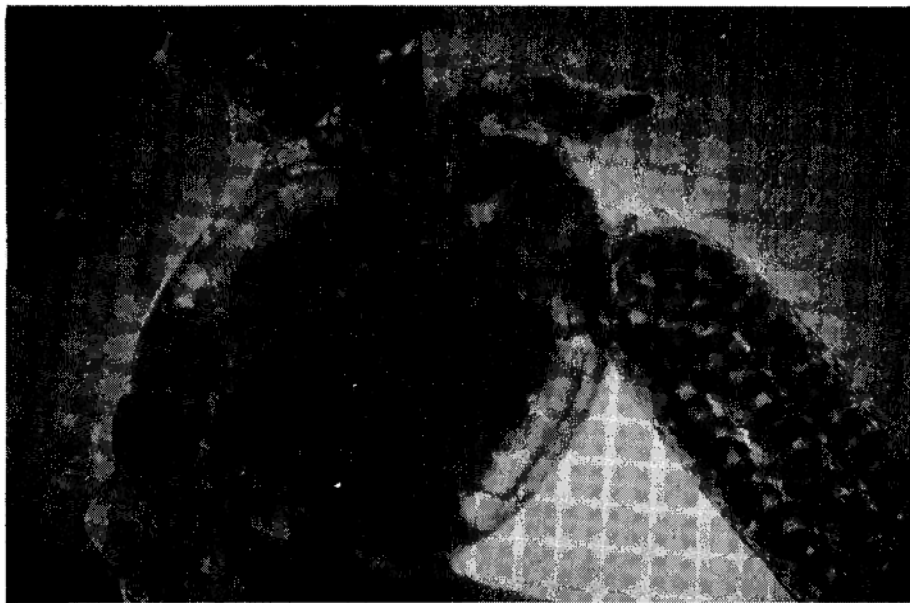


図3 *Clavellodes ditrematis* の軀幹および卵絲



図4 クロダイ鰓耙に寄生する *Clavellodes ditrematis*

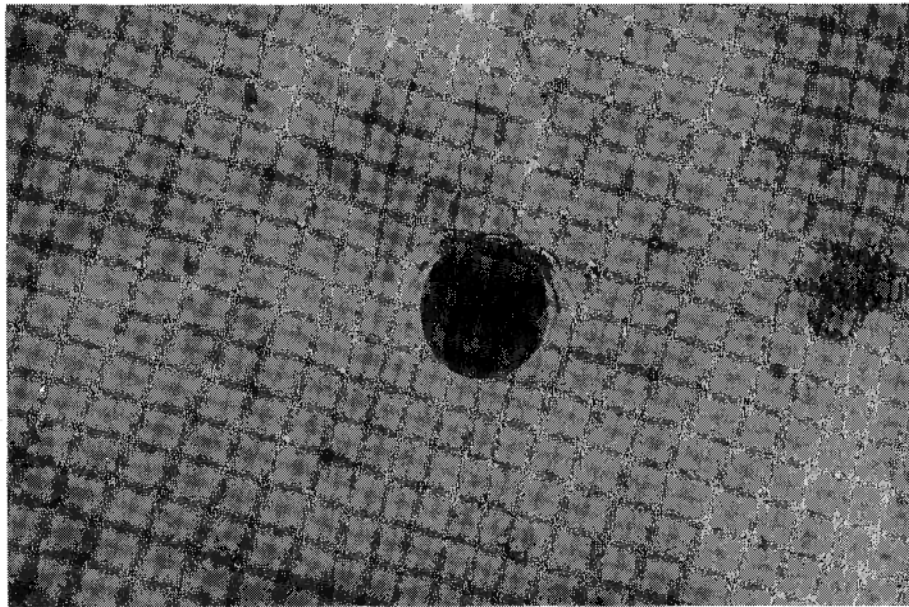


図5 *Clavellodes ditrematis* の卵絲から孵化した nauplius

clavellodes ditremat の寄生については、養成中に寄生したものが養成開始前の種苗時すなわち天然にいる時すでに寄生していたものかについては、はっきりしないが、浜名湖で漁獲される1年魚以上の魚体には相当これが寄生していることから考えると、これは養成中に寄生したものではなく、天然においてすでに寄生しており、それが徐々に成長して10月頃より一部魚体をへい死に至らしめたものとも考えられる。一方健康魚と思われる魚体について観察したところ数個の寄生は殆んど魚体に認められた。

また、この駆除について、2・3薬浴を試みたがその効果は全く認められなかった。

オ 養成結果

養成結果を取りまとめると、表4の通りであり、養成種苗は池中養殖用として一部養殖業者に供給した。

表4 養成結果

項目	放養時	取揚時	備考
総尾数	10,000尾	7,769尾	
総重量	60kg	280kg	
平均体重	6.1g	36.1g	
斃死数	847尾		
不明魚数	1,384尾		
歩留り	77.7%		
増肉量	266.2kg		
投餌量	1,437kg		生のまま重量
増肉係数	5.4		
転換効率	18.5%		
日間成長率	1.2%		
日間摂餌率	6.5%		

(2) ニジマス海水馴致および海水養成事業

近年ニジマスの海水養殖に対する関心が高まり、当県をはじめとして2・3の県で実施されているが、その実施にあたっては実験的段階または数量的に少ないものが多くその企業化については未だ多くの問題点が残されているものと考えられる。

前年度においては、その企業化をはかるために体重15g程度のものを60,000尾海水馴致し種苗として県下に供給したが、その結果はあまり良くなかった。その概要は海水に馴致して各養魚施設に配布するまでの歩留りはかなり良かったのであるが、これを養魚池（海面生簀等）に放養後、数日で各池共その50%以上のへい死をみており、その時生残したものはその後殆んどへい死をみる事がなかった。

この原因については色々考えられるが、一番大きなものは馴致期間が短日であったため見た目には海水に馴致できたかのようにみえたが、実際には未だ完全に馴致しておらずそのために馴致池からの取揚げ、輸送などの衝激に対して充分耐えることができなかったのではなかろうか。

また海水馴致に対する抵抗性は魚体の大きさ、時期などによりかなり差異があることはこれまで知見として得られているが、これらを更に検討するために今年度は魚体の大

きさ別に海水馴致し、引き続きそれぞれについて養成をおこなった。

ア ニジマス海水馴致

A 魚体および数量

馴致魚は南設楽郡鳳来町鳳来養魚場でふ化養成したもので、馴致は魚体別に次の3回に分けて実施した。

第1回	平均体重	20g	5,000尾	100kg
第2回	平均体重	550g	690尾	380kg
第3回	平均体重	100g	1,500尾	150kg

B 馴致池

馴致池は2m×10m×1.5mの全面コンクリート天蓋付きの池で、淡・海水がバルブにより随意に注水出来るもので、比重調整はこの淡・海水の注入量により調節し、1面水容量は約20トンとし、注水量は最低毎分270ℓとした。池面使用状況は次のとおりである。

第1回	2面
第2回	4面
第3回	2面

C 馴致期間

第1回	昭和40年10月4日～昭和40年11月2日	30日間
第2回	昭和40年11月5日～昭和40年11月29日	25日間
第3回	昭和40年12月7日～昭和40年12月26日	20日間

D 馴致概要および結果

期間中の比重変化、へい死数および生残率の変化ならびにその結果は図1～4ならびに表1にしめすとおりである。

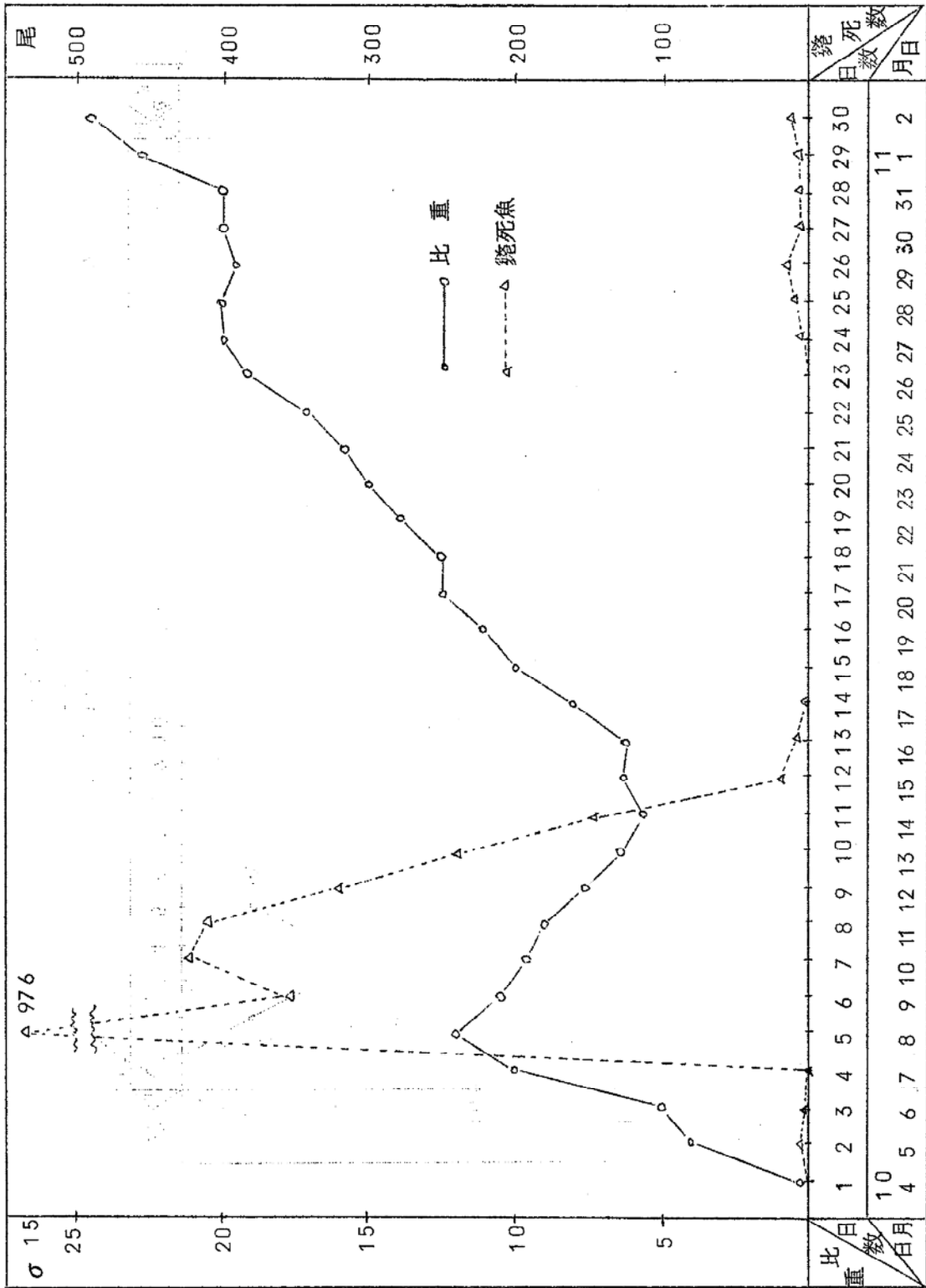


図1 才1回海水馴致比重変化および毙死状況

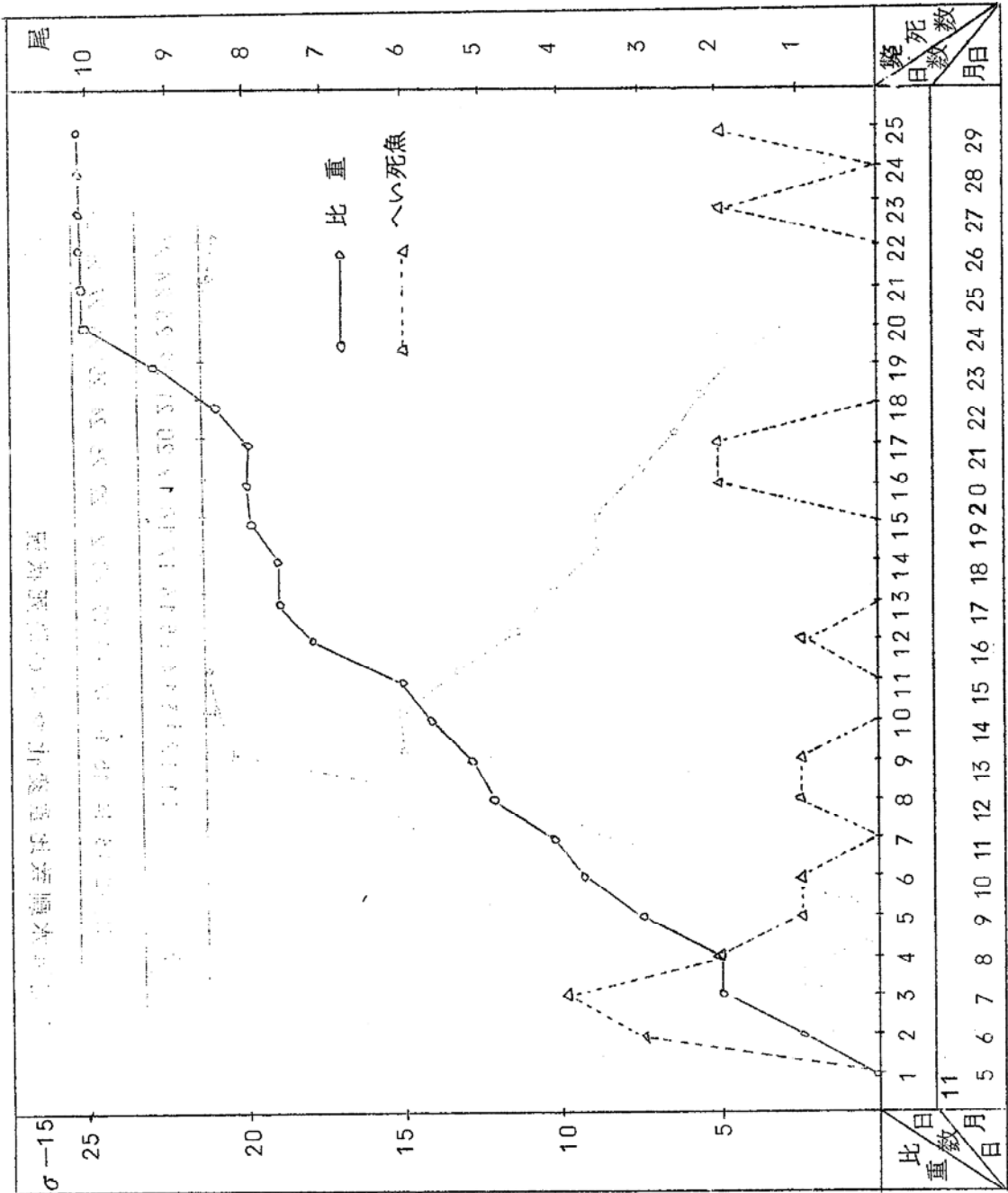


図2. 才2回海水馴致比重変化および死魚状況

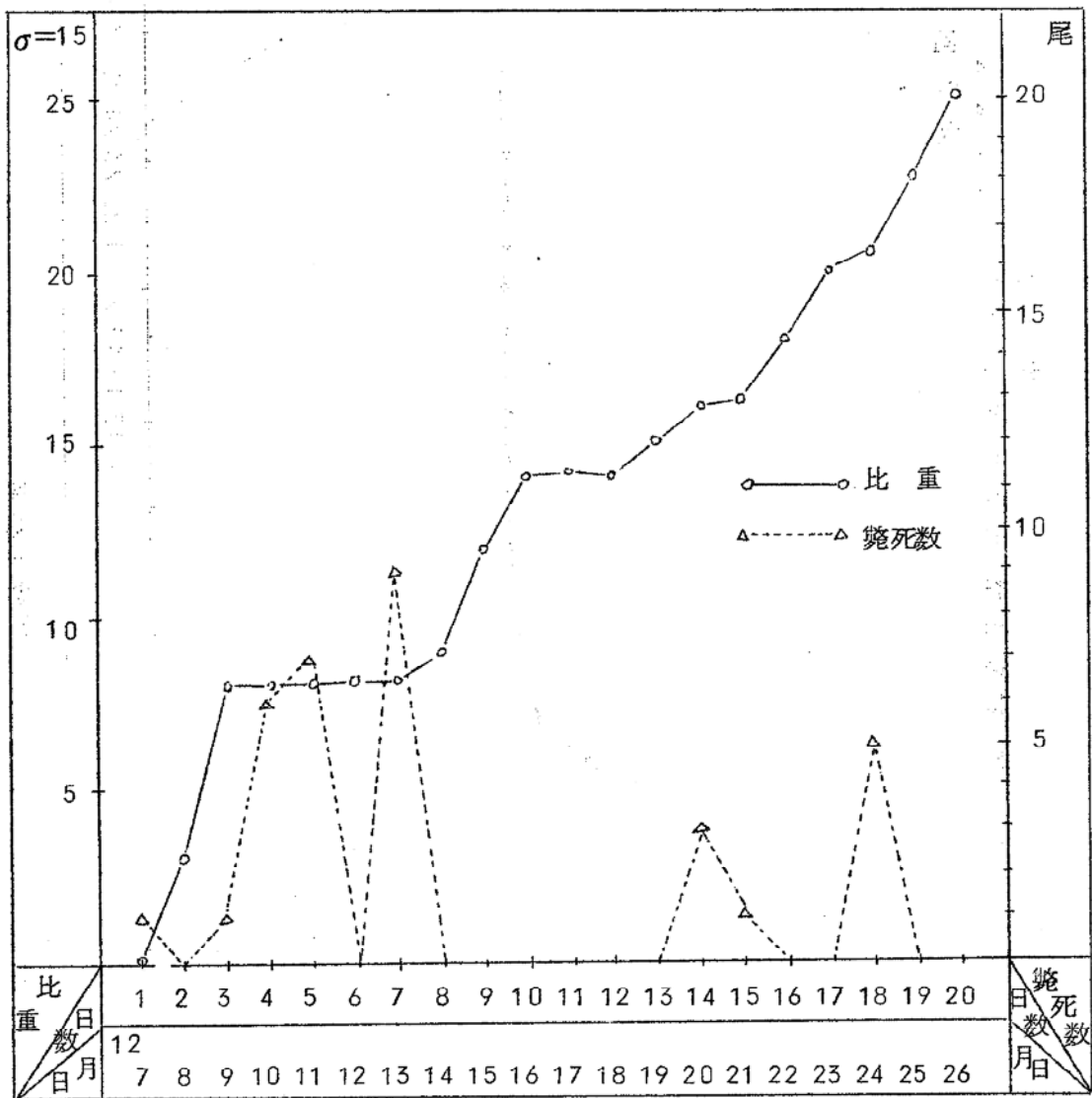
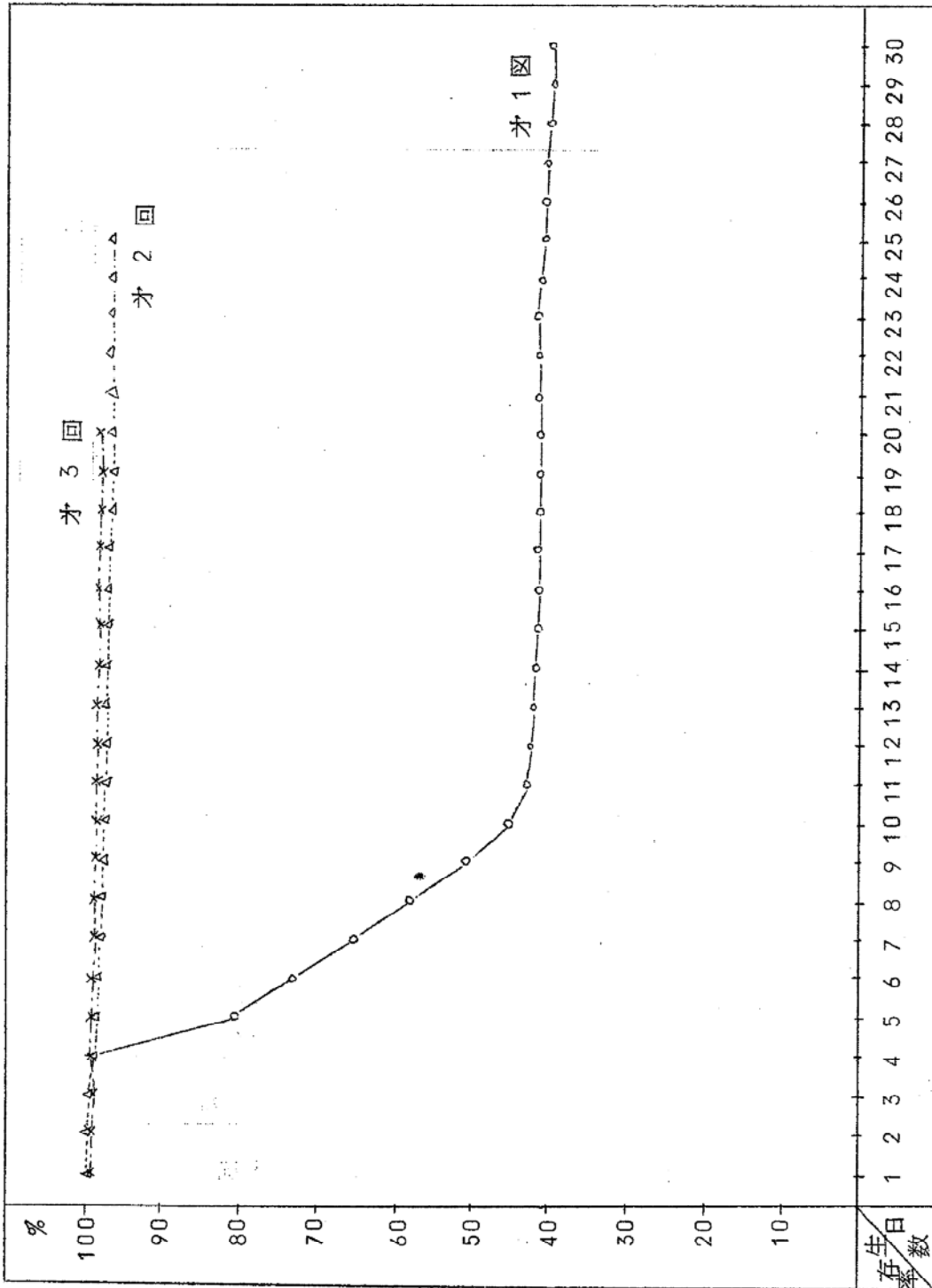


図3 才3回海水馴致比重変化および斃死状況



才 4 回 魚体別 (回別) 海水馴致生存率

表1 海水馴致結果

項 目	第 1 回	第 2 回	第 3 回
放 養 重 量	100 K ϕ	380 K ϕ	150 K ϕ
放 養 尾 数	5,000 尾	690 尾	1,500 尾
平 均 体 重	20 ϕ	550 ϕ	100 ϕ
馴 致 日 数	30 日	25 日	20 日
へい死数	2,996 尾	22 尾	33 尾
生 残 率	40.0%	96.8%	97.8%
水 温	17.5~21.7 °C	14.7~18.6 °C	6.7~11.8 °C
総 給 餌 量	16.5k ϕ	90.0K ϕ	24.8K ϕ

これらより、気、水温などの季節的環境条件は若干異なるが、100 ϕ 以上の大型魚についてはいずれも95%以上の高い生残率を示しているのに対し、20 ϕ 級の小型魚においては40%と非常に低くなっている。このような結果はこれまで知見として得られていることに全く同じであり、このことは100 ϕ 以上の大型魚は比重変化に順応し易く、これに対し20 ϕ 級の小型魚では順応し難いものと考えられる。

一方、前年度の馴致結果においては、15 ϕ の小型魚を使用したにもかかわらず非常に高い生残率を示しているが、これは前述のごとくその後の歩減りが非常に大きく、最終的生残率としては、大体40~50%となっている。これらからみても小型魚の海水馴致については、今後一考を要するのではなからうか。

図1から小型魚のへい死状況と比重曲線をみると、比重10~12に上昇した時に大量のへい死がみられ、その後若干比重を下げたのであるが、しばらくはへい死はつづき摂餌もしなくなった。その後へい死も止まり、摂餌も活発となったので再び比重を上げていった結果、今度は比重20前後で若干へい死がみられるようになった。これは、20 ϕ 級の小型魚における比重化に対する許容範囲が10~12程度のところであり、また比重が或る程度上昇した場合これに完全に馴致するには、10日前後の日数が必要であるとは考えられないであろうか。このことは100 ϕ 級の魚体についても図3から若干その傾向はみられるようである。

これから今後小型魚の海水馴致にあたっては、比重7～8程度のところで10日前後、その後15～17の比重で10日前後と比重変化を大きく二段階に分けて、25～30日を要しておこなえばかなり高い生残率が期待できるのではなかろうか。

イ ニジマスの海水養成

前記の方法で海水馴致したニジマスの大半を引続き海水養成をおこなった。

A 魚体および数量

養成種苗は、先に海水馴致したものでそれぞれ魚体の大きさ別に分養，養成した。

第1回	平均体重	22g	1,000尾	22kg
第2回	平均体重	640g	280尾	180kg
第3回	平均体重	80g	1,000尾	80kg

B 養成池

第1回および第2回 干満潮差を利用して海水交流する10m×20mの全面コンクリート池で最低水深1.5mを保つようにしたものを使用した。

第3回 機構は前2回と全く同じもので池の大きさが20m×60mのものを使用した。

C 養成期間

第1回	昭和40年11月2日～昭和41年4月6日	155日間
第2回	昭和40年11月27日～昭和41年4月21日	145日間
第3回	昭和40年12月27日～昭和41年4月27日	121日間

D 経過概要

a 水温および比重

養成期間中の旬別，水温，比重は図5にしめすとおりである。

b 餌料

餌料は一部市販の配合餌料を使用したか、生カタクチイワシが容易に入手できることから主に生カタクチイワシのミンチしたものを投与した。投餌量は摂餌状況をみながら適宜投与した。

期間中の投餌量は表2のとおりである。

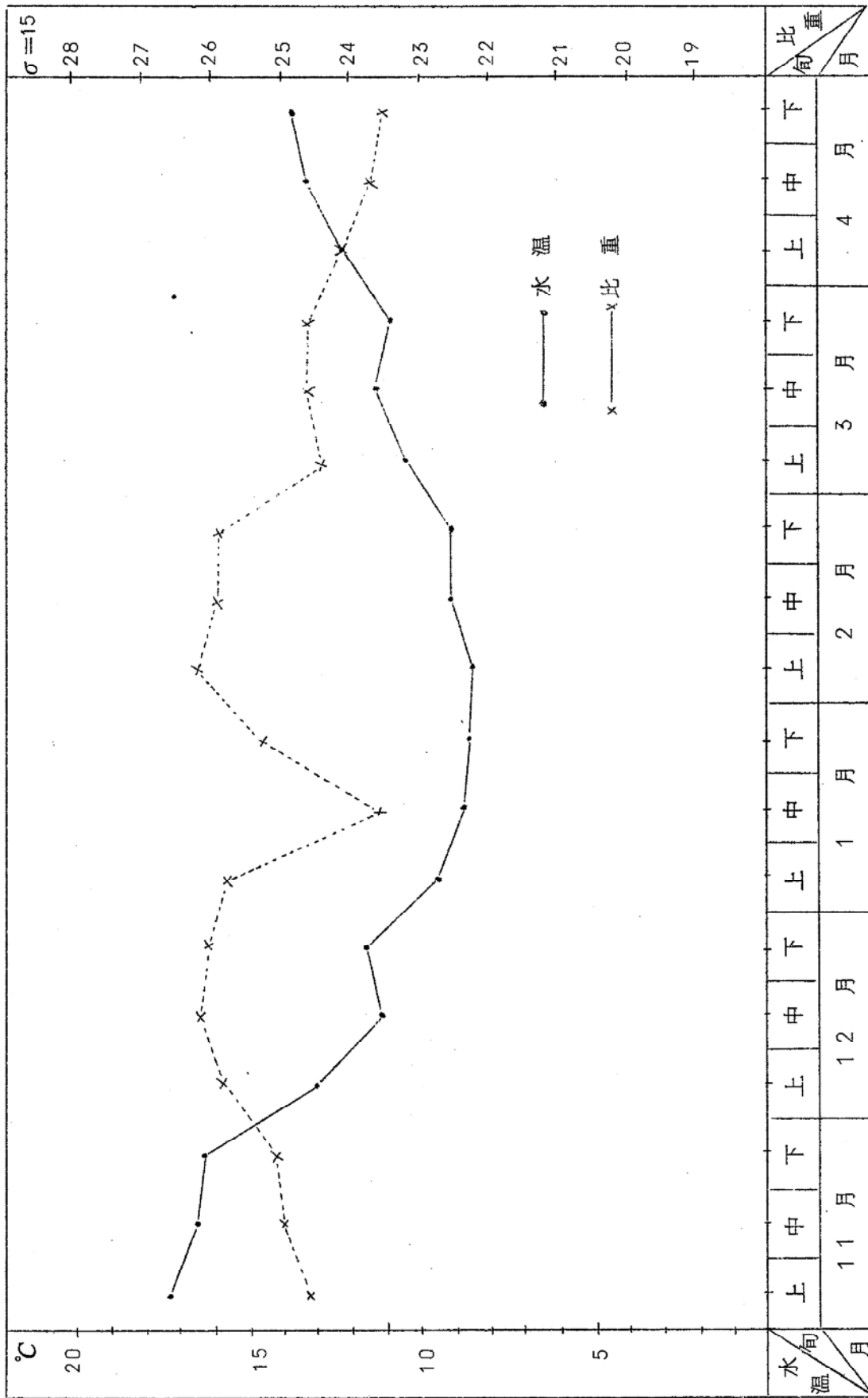


图5 旬別・水温比重の変化 (10時観測平均)

表2 投餌量

単位 Kg

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	計	乾物換算値	計
第1回	P	20.3		11.0	12.5			43.8	38.2	190.7
	生	53.0	144.0	121.0	112.0	148.0	32.0	610.0	152.5	
第2回	P	2.0		11.0	4.0			17.0	14.8	218.3
	生	4.0	207.0	185.0	120.0	158.0	140.0	814.0	203.5	
第3回	P		2.2	14.0	8.0			24.2	21.1	249.9
	生		10.0	98.0	105.0	354.0	348.0	915.0	228.8	

P. : 市販配合餌料 生: 生カタクチイワシ

E 養成結果

養成結果は表3のとおりであるが、これより海水に完全に馴致させたニジマスは、一般海産魚の養魚施設で十分養成が可能ながことが明らかである。

養成餌料には、主に生カタクチイワシを使用したか摂餌は活発で、増肉係数も乾燥重量換算値で1.00~1.03と非常に良くなっており、小型魚については馴致そのものに若干の問題は残るが、100g以上の魚体については今後市場開拓さえおこなえばかなり有望な事業のように考えられる。

表3 養成結果

	第1回		第2回		第3回	
	放養時	取揚時	放養時	取揚時	放養時	取揚時
総尾数	1,000尾	897尾	280尾	270尾	1,000尾	936尾
総重量	22Kg	200Kg	180Kg	382Kg	80Kg	314Kg
平均体重	22g	223g	640g	1,415g	80g	336g
へい死数		45尾		7尾		28尾
不明魚数		58尾		3尾		36尾
歩留り		89.7%		96.3%		93.6%
増肉量		190.6Kg		212.3Kg		247.3Kg
投餌量		190.7Kg		218.3Kg		249.9Kg
増肉係数		1.00		1.03		1.01
転換効率		99%		96%		99%
日間成長率		1.10%		0.52%		1.04%
日間投餌率		1.11%		0.54%		1.05%

3. 集団操業指導事業

(1) 主 旨

沿岸小型漁船の航海の安全と漁獲能率の向上をはかる。

(2) 事業概要並びに実績

ア 4 月

渥美外海における「きす流し網漁業」の漁場探索及び海上指導

イ 5 月

「きす流し網漁業」の海上指導並びに外海大型魚礁（黒入場）周辺「さば」「いさぎ」漁場調査。

ウ 6 月

湾口附近及び外海魚礁を中心とした「いさぎ」「さば」「ひらめ」「あじ」一本釣漁業の漁場探索。

エ 7 月

先月同様「さば」「いさぎ」を対象として外海魚礁漁場探索。

オ 8 月

上～中旬は前月同様、下旬は「いなだ」の来遊わ、例年より早くそのため漁場探索を行つた。

カ 9 月

上～中旬は「いなだ」の探索に重点を置き、好漁場の通報誘導に努めた。

キ 10月

「ふぐ」の漁期にはいるので、予備調査として渥美外海の漁場観測を行なった。

ク 11月

上旬は昨年の調査にかんがみ、早目に駿河湾愛鷹岩より吹合岬40～60m線を中心に事前調査と試験操業を実施したが「とらふぐ」の来遊少なく各船とも釣獲量は5日間で20～30尾と不漁に終わった。又中旬は渥美外海で「ふぐ」の海上指導に当たったが、年々不漁傾向で本年も好漁を予想出来る要素は見当らなかつた。なお「さばふぐ」「きんふぐ」については昨年同様豊漁であった。しかし魚価が「とらふぐ」の $\frac{1}{10}$ と安く、これは経営上安定性を欠くことが大いに懸念される場所である。これについては何らかの手を打つ（新しい加工技術の開発）べく努力しているが種々の隘路により未だこの解決策は見出されないうている。

ケ 12月

季節風強く「ふぐ」延縄漁業は1日1隻4～5尾の釣獲(とらふぐ)で極度の不振に落ち込んだ。加ふるに漁場の沖合移動(水深80～90m線)により出漁日数は特に制約を受けることとなった。この月の平均出漁日数は日間賀地区ふぐ延縄漁船で8日弱であった。

コ 1月

一本釣漁業の冬期漁閉期対策樹立のため、熊野灘における「いか」一本釣漁業の試験操業を実施した。

サ 2月

上～中旬は強風波浪の日多く、下旬、瀬美外海高松沖から舞坂沖にかけ「きす」流し網漁業の海上指導を実施した。

シ 3月

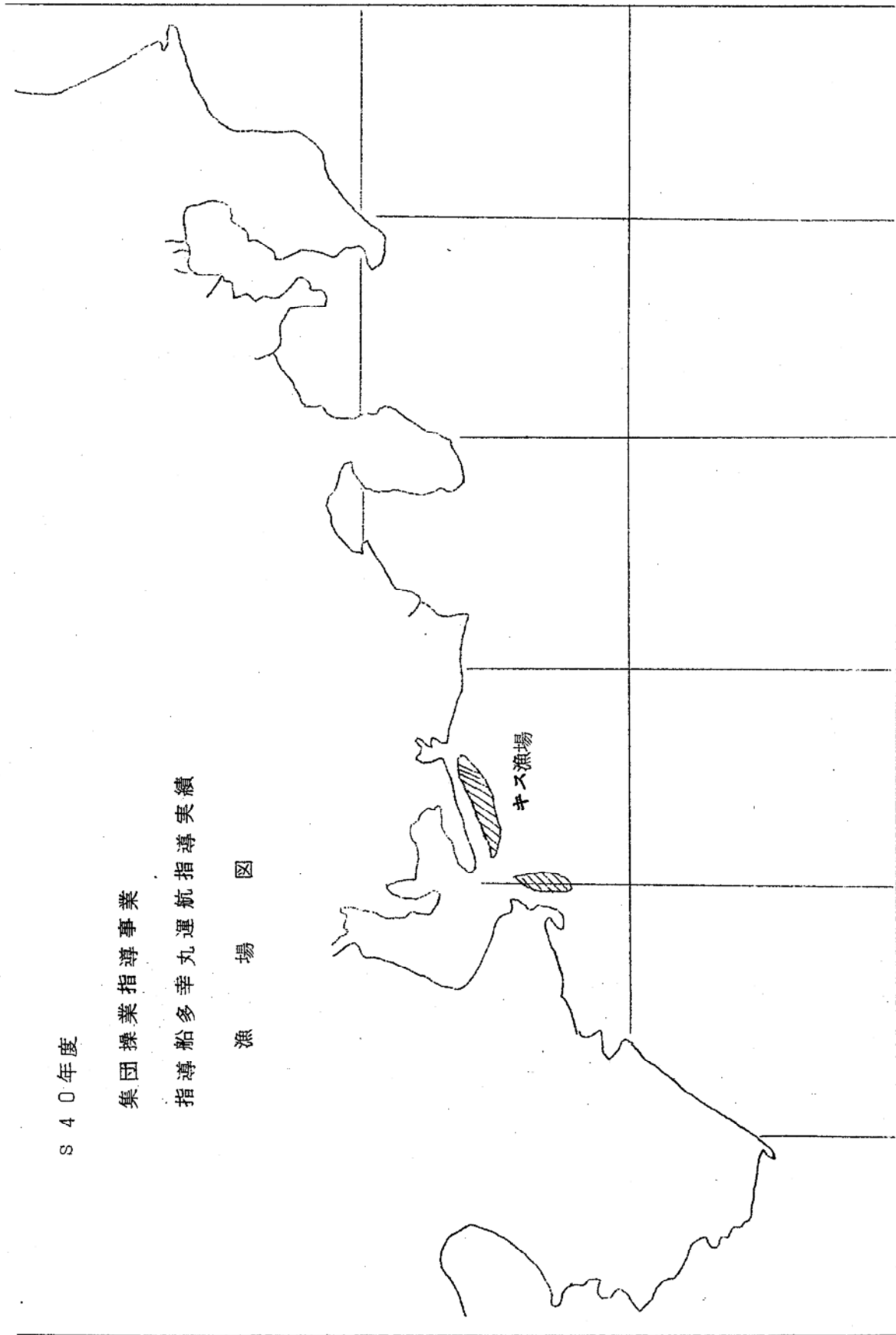
上旬、瀬美外海の「きす」漁場の観測、魚群探索を行なった。調査結果から本年の漁況は昨年並の好漁が予想された。

S 4 0 年 度

集 団 操 業 指 導 事 業

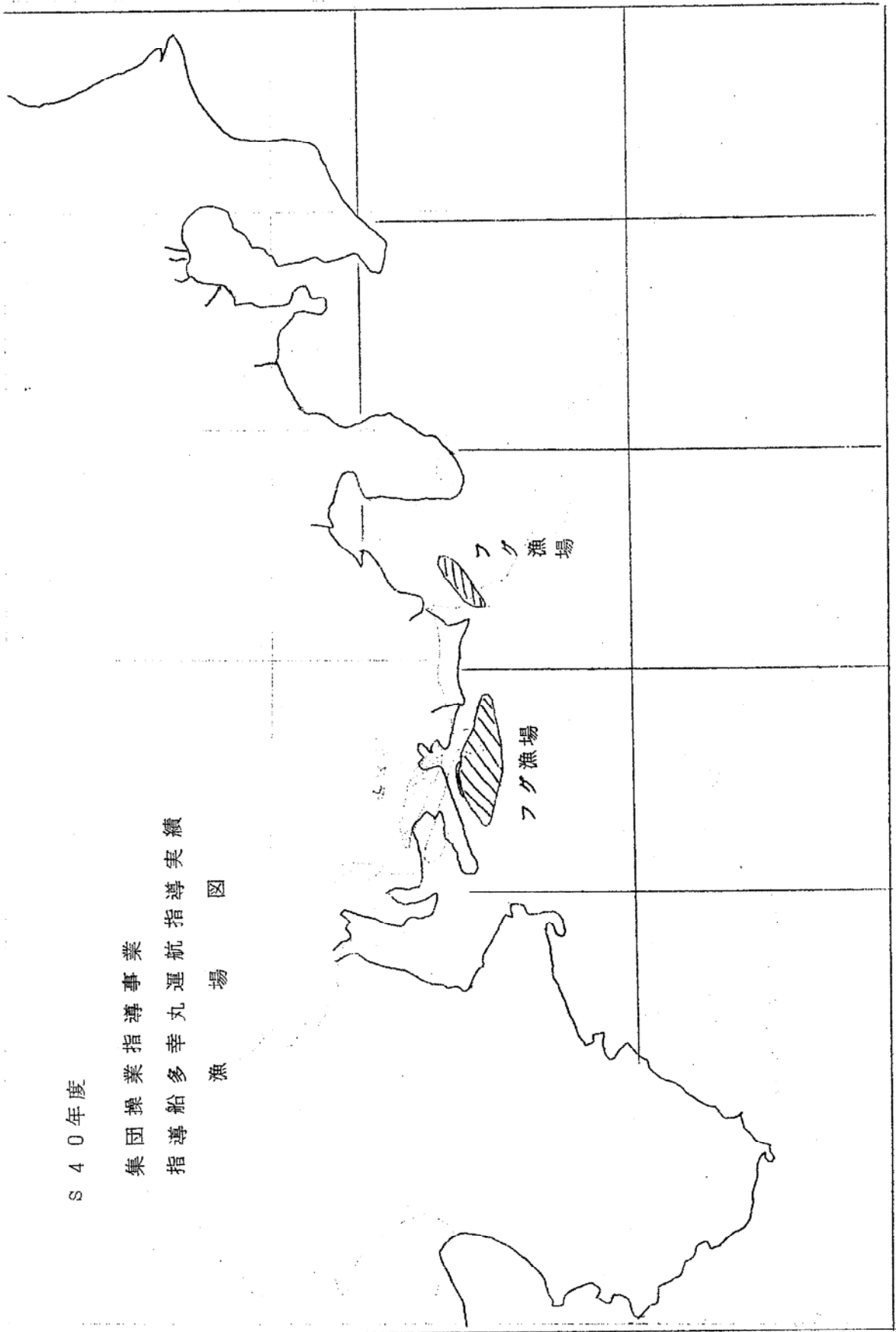
指 導 船 多 幸 丸 運 航 指 導 実 績

漁 場 図



S 4 0 年 度

集 団 操 業 指 導 事 業
指 導 船 多 幸 丸 運 航 指 導 実 績
漁 場 図



◎ 1本釣漁場・漁況・海況調査報告

6～8月までの「さば」漁場は本県においては渥美外海，大型魚礁周辺及び高松沖が主漁場である。今年は「さば」の来遊が多くみられ，伊良湖・神島周辺，伊勢湾沖ノ瀬魚礁周辺にも漁場が形成されたが出漁日数，隻数は外海高松沖の約半分であった。漁法は「こませ」を用いる中層一本釣で，海況は表1のような水温状況であった。これを「さば」など回遊性魚に重要な影響を及ぼすと考えられる水温分布状況から判断すると「さば」の漁獲水深15～30m層の水温は6月高松沖，伊良湖漁場で19℃前後，7月も19℃前後，8月では20℃前後で「さば」の適水温域を示している。15～30m層の水温傾斜もあまりないようである。又「さば」の生態として，集光性はあまりなく表層に浮くということも少ないようである。このため「跳ね釣」はあまり効果がなく当地域では昼間漁として採捕されている。

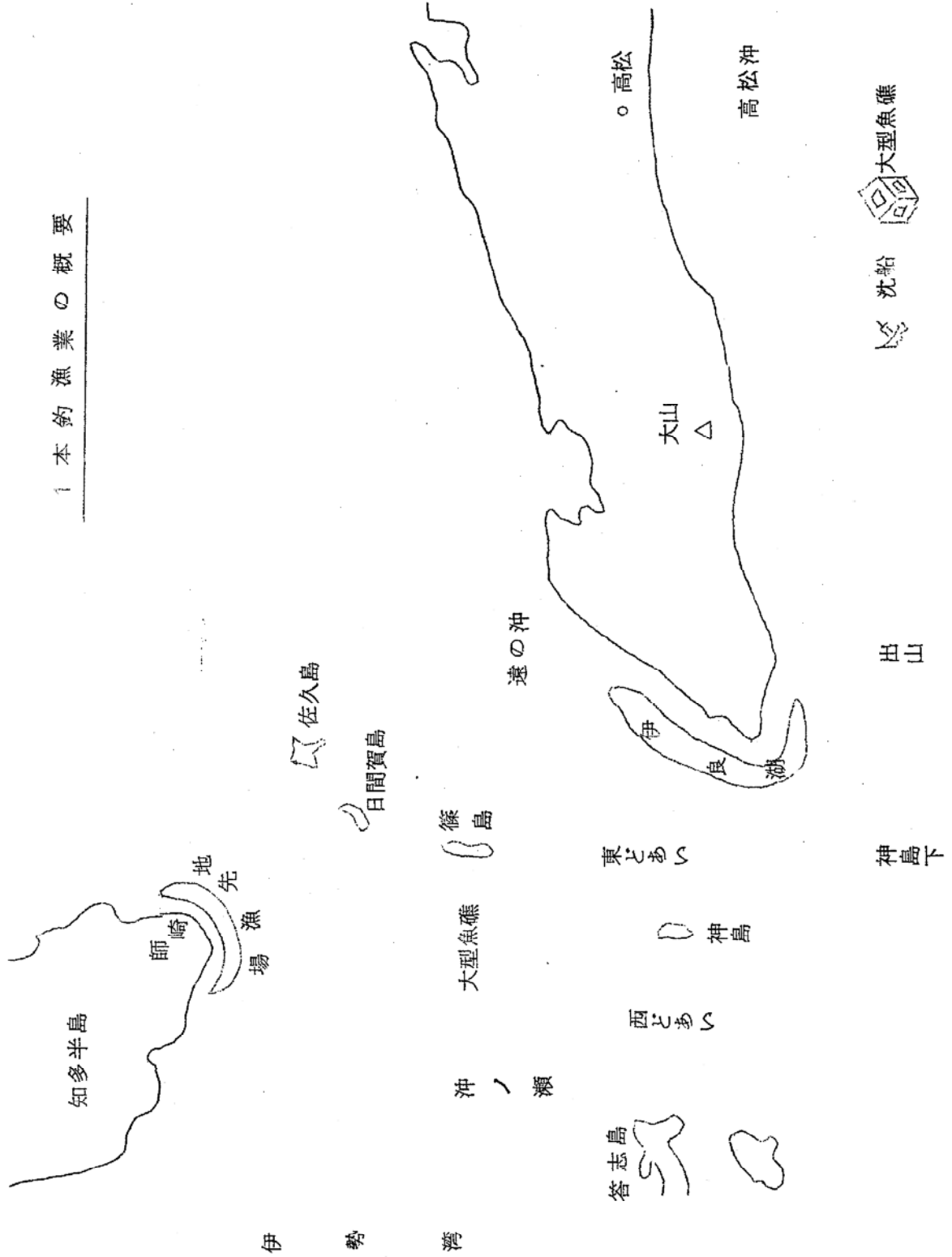
表1

観測層 月日	10 m			20 m			30 m		
	伊良湖	高松	沖合	伊良湖	高松沖	沖合	伊良湖	高松	沖合
6. 10	18.9	19.1	20.7	18.7	19.0	20.2	18.1		19.7
7. 10	19.7	20.6	21.0	19.7	19.3	20.0	19.1		19.1
8. 11	20.1	20.8	22.4	19.8	20.5	22.3	19.6		22.3
9. 8	23.4	22.7	23.1	22.8	21.9	23.0	23.1		22.7
10. 10	20.3	21.5	22.3	21.3	21.4	21.2	21.0		21.2
11. 13	16.9	18.5	18.4	16.2	17.0	18.2	16.2		18.2

9月に入ってから1本釣漁業は「いなだ」が主釣獲物である。漁期には各漁協ともほとんどの釣船が出漁する。「いなだ」の漁況としては暖水進入接岸のとき，季節風の強いとき（しけ気味）とされているが本県の1本釣漁船は1～2tの小型船であるため出漁は不可能である。

表1と「いなだ」との状況を考えると「いなだ」の好漁時は，水温傾斜の穏やかなときとされているが9～11月には外海漁場はその条件をみたしている。又「いなだ」の適水温は18～21℃といわれているがこの条件もその釣獲水深において充分みたされている。

1 本 釣 漁 業 の 概 要



漁場名	底質	漁獲魚種	備考
高松沖	岩盤	イサギ アジ サバ イナダ ホタテマス	漁期短い
出山	瀬	イナダ ムロアジ サバ	ク
神島下	岩盤	イサギ アジ タコ	漁期長い
東どあい	岩盤瀬	タチ アジ タイ カサゴ メバル タコ	汐流早い漁業長い
西どあい	ク	タイ アジ カサゴ メバル タコ	
遠の沖	架磯	イナダ マダカ	
沖ノ瀬	ク	イナダ クロダイ マダカ タコ	
地先	ク	マダカ クロダイ	

1本釣の種類

技釣 - たい・いなだ釣 あじ・さば釣 またか釣 たす釣 めばる・かさご釣

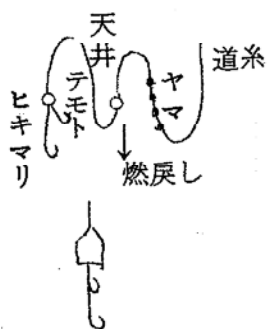
1本釣 - ひらめ釣 たい・まだか釣 くらだい釣 たこ釣

漁期

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
かさご	_____											
めばる	_____											
まだか	_____											
たい	_____											
たち	_____											
あじ・さば	_____											
ひらめ	_____											
いさぎ	_____											
くらだい	_____											
いなだ	_____											

1本釣具

① タイ釣具



道糸	テトロンナイロン	1.8~2.0分	100m
ヤマ	よつあみ	"	30m
沈子	120ヶ	32~33匂	
天上	ナイロンテグス	2分	3m
チモト	"	0.6~1分	

① 秋使用 10~13匂 小中型エビ2~3尾

② 夏使用 " 大型エビ1尾

③ ヒラメ釣具



ヤマ	140ヶ	40匂	
鉤	親 2.0~1.6寸	子 1.8~1.6寸	
たま	鉄40~50匂		
餌	生小アジ	サバ	イカ

㊦ ふかせ釣 (タイ・イナダ・クロダイ・マダカ)

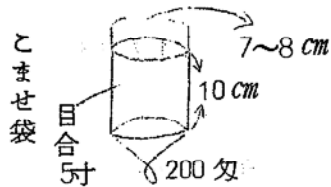
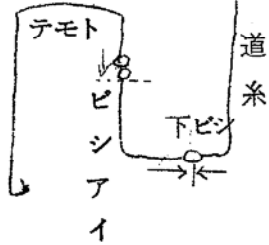
ピンアイ ナイロンテグス 2分 4m

チモト " 1.5~1.2分 2m

ピン 1.5~2.0匁

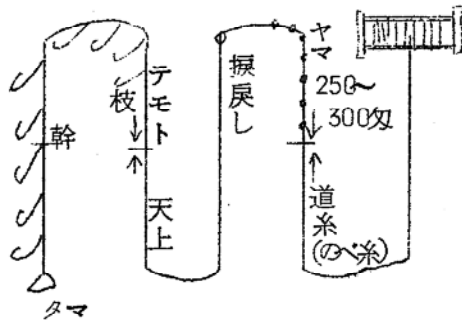
鉤 1.0~1.8匁

○ イナダ・マダカ釣ではピンが1ヶ所



技 釣

① メバル アジ釣具



道糸 テトロン 1~2分 250m

天上 ナイロンテグス 1~1.6分 5m

幹 " " 0.5~0.7分 10m

枝 " " " 3m

釣 1.2~1.3寸

㊧ タイ釣具 (錨止め撒餌釣)

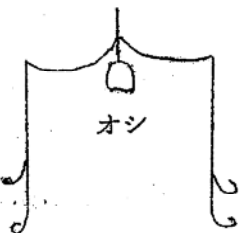


○ ヤマ無し

○ タマは鉄 20~80匁

○ 餌はエビ

㊨ タチ釣具



タマ 鉄 110~130匁

釣 親 1.6寸

子 2.0寸

◎ 熊野灘「いか」漁場調査について

〔目的〕

集団操業指導事業の一環として41年1月17日から22日まで熊野灘において「いか」1本釣漁業の漁場調査を行った。この調査は本県の沿岸小型1本釣漁業者の冬期漁閑期対策樹立に必要な基礎資料を獲得するための事前調査である。

第1日(17日)

09時師崎港を出港し17時30分尾鷲港に入港する。

第2日(18日)

午前中は地元業者からの聞き取り調査を行ない、午後三重県水試尾鷲分場の指導のもとに釣漁具の作成に当る。

聞き取り調査の結果、漁場は長島沖から三木崎沖(漁場図参照)50~60m線の段淵附近まで広範囲に拡がっており、一夜平均40~50隻の出漁船あり地元業者も相当この資源を重要視しているようである。又、漁法は魚探にて段淵を探索し段上に投錨し集魚灯をつけ魚群の浮上をまつのであるが、擬餌針は余り明るい処では効果を發揮しない。集魚灯は船体の中央部に懸け、釣針は船蔭の海中に垂れ、且つ動かして活魚のように見せながら釣獲する。

以上の聞き取り調査を参考に、尾鷲近海を3漁場に大別(寺島崎沖・長島沖・三木崎沖)して50~60m線の漁場で試験操業を実施した。

第3日(19日)

午前中は尾鷲市場で釣獲状況の調査に当った。釣獲は各船によって多少の違いは見られたが、1t~2t(集魚灯1KW2個)釣子1~2名の漁船で、一夜50~60kgの漁があり、その釣獲状況は「やりいか」、「するめいか」の2種であり6割が「やりいか」であった。市場での価格はやりいか220~250円/kg、するめいか150~180円/kgで取引されていた。

午後漁場に向う。まず漁場図に見るように寺島崎沖を当ってみた。漁場附近の段淵を魚探で探索し段上に投錨するとともに「いか」と水温分布を知るため表層30m層、50m層の水温測定を実施し、18時集魚灯をつけ魚具を投入して操業にとりかかった。しかし乗組員の不馴と集魚灯の取付位置が船体構造上芳しくなく蔭の形成が少く釣獲量は15kg前後とあまり好成績ではなかつた。斯のような漁法の場合、本県小型漁船による操業は容易であり相当量の釣獲は出来るものと思われる。第1回目の試験操業は20日

午前2時を以て打切り尾鷲港に入港した。

第4日(20日)

午後尾鷲港を出港し長島沖漁場を当った。この日は東北東の風が強く操業試験は無理のため、50~60m線の水温分布及び魚探による段淵状況の調査を実施したにとどまった。夕刻尾鷲港に入港した。

第5日(21日)

この日は三木崎沖の試験操業を実施した。この漁場と前の2漁場とは殆んど同じ水温分布状況を示しており、しかも、海底は段淵が非常に多く、いか群を来遊せしめる好適な海況を形成している。又、紀伊半島の山蔭で冬期の季節風による出漁日数の制約は極めて少ないところである。この漁場での釣獲量は40kgと好成績であった。

漁場名 \ 観測層	表層	30m層	50m層
三木崎沖	17.5	17.1	16.3
寺島崎沖	17.5	17.2	16.2
長島沖	17.6	17.2	16.3

第6日(22日)

一応これで調査を打切り尾鷲港より師崎港に帰る

むすび

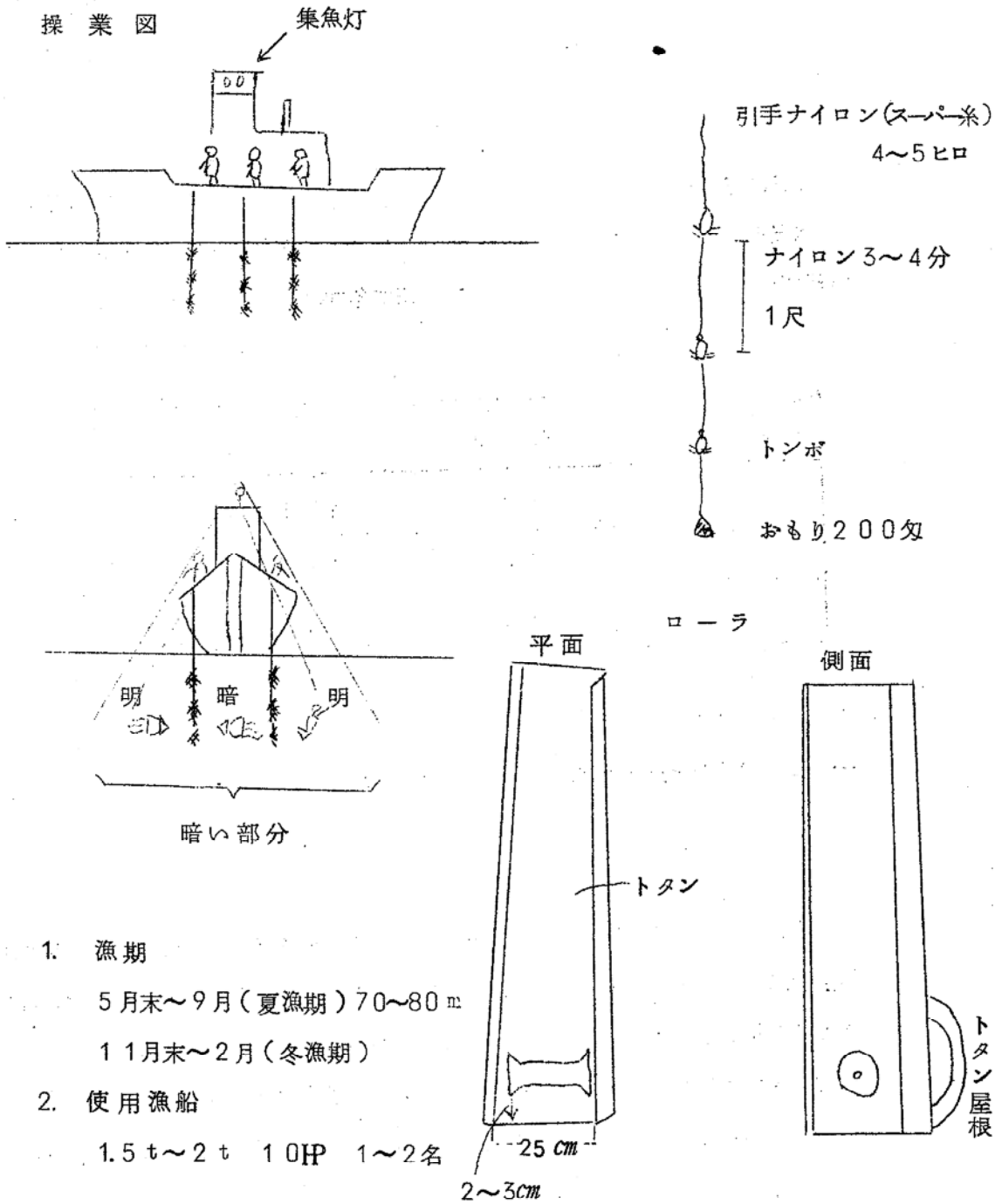
以上の調査から考察して水温垂直分布状況は16~17度の水帯を示しており「いか」の適水温は10~19°Cと云われているが、水温条件は「いか」の索餌行動のためにより、好適な海況を形成している事がわかる。

釣獲された胃中を調べた結果、小型魚類、浮游甲殻類などが認められた。これは「いか」の索餌期における生存適温と餌料生物の適温と密接な関係があることがわかる。又、水温分布状況が「いか」の適温水帯を示していることは、集魚灯による「いか」の集光性を利用して浮上せしめ、釣獲を容易ならしめることも可能である。

しかも海底は多くの段淵があり、適当な潮目を作り餌料生物が生存し、「いか」群

の索餌活動がより活発に段淵附近で展開されることがわかる。

以上の結果から熊野灘沿岸は漁況・海況とも沿岸漁業の閑漁期対策として最適であり、技術的にも簡易、僅少資本で実施し得るイカ漁業は最も着手し易いものであり、今後も集団操業の一端として漁場拡大に努力したい。



いしか漁場図

